

北海道民放クラブだより

鈴木昭伸さん偲び

F・O戦をテレビ観戦

9月13日午後3時から、8月8日に逝去された、我がフアイトーズ応援団同好会会長の鈴木昭伸さんを偲びオリックスス戦をテレビで観戦をした。



遺影に好きな酒と煙草

レストラン・ユック店内の壁面には、鈴木さん力作のポスターをところ狭しと飾り付け、加えて今まで鈴木さんが参加した札幌ドームはもとより、旭川スタルヒン球場、東北民放クラブとの交流などスナップ写真の拡大版を多数掲示した。元氣だったころの鈴木さんの生前の姿に何故かしんみりした。店内に飾られた遺影の前には故人が愛した酒と煙草が供えられた。試合は大谷翔平が先発、1対0で辛勝。 富樫 久夫(S T V)

編集者入院顛末記

在職中の55歳成人病検診で不整脈が見つかった私は、それ以来、通院で不整脈治療薬を貰っている。10月末、呼吸困難や頻尿の症状が出た。2月から血液を溶かす薬が変更になったので、副作用をインターネットで調べたら、呼吸困難も載っている。すぐ元のワーファリンに変えてもらったが、症状は改善しない。

11月4日若い医師の診断を受け、心臓のX線写真で胸水のたまってることが分かった。昨年10月強心剤のジゴキシン投薬を中止したところ、同じ症状になったことがあった。翌日、かかりつけの主治医の診断を受けたら、即入院となった。今服用している薬には呼吸困難の副作用はない、他の原因だという。初めて車いすに乗せられて、心エコー、心臓X線撮影を受けて、心不全の診断、入院しなければボックリ逝きかねないと脅かされる。鼻からの酸素吸入も始まる。

困ったのは会報11月号の編集作

業が途中なことで、全国版の締め切りが11月20日に迫っていることだった。長原編集委員に連絡、今後の対応を平松理事長と相談してもらった。

PCさえあれば、病室で作業は出来る。

平松理事長にお願いして、家に取りに行つて貰う段取りとなった。

しかし、症状が徐々におさまり、11月8日、酸素吸入も取れ、11月10日外出許可。自宅に戻り、PCを外して病床に持ち込んだ。これで、編集作業ができることほっとした。

入院してからの日々はほとんど何も無い。看護師の血圧測定や心臓の働きを抑える、これまでの強心剤とは真逆の投薬や数種類の利尿剤、数日おきの心臓X線撮影だけ、主治医の診察もない。

胸には24時間心電計が装着されていて、看護師の監視を受けている。入浴は入院6日目からOKとなった。

事務局に届いていた原稿を11月13日に入手、一応8Pの11月号第1稿が出来た。印刷会社の担当者翌日フラッシュメモリーを受け取りに来てもらい、11月号の第

一段階の編集作業は終わった。あとは5〜6Pにカメラ会の撮影会作品を掲載する作業だけだ。長原編集委員に作業を依頼する。長原さんはカメラ会と相談して作品を選別して作成、メールで印刷会社に送った。

最終チェックは北海道民放クラブ事務局で11月19日にゲラの最終チェックをした。

食べて寝ての入院生活で体重が増えてはいけなさとご飯の量を半分減らしてもらった。入院した時、57・5kgだった体重が2週間後には51kg台と高校時代以来の最低体重となった。これも、利尿剤の服用で、1日20回以上の排尿があり疲れた。体内の余分な水分が抜け落ちたせいらしい。あまり水分が落ちると脱水症状になるので、水分補給は普段以上、持ち込んだお茶を飲み、出されるお茶や水は全て飲んだ。

幸い、BSでテニス中継が深夜にあり、普段寝る時間を退屈しないで過ごすことが出来た。私のように編集担当者が倒れるケースが今後とも考えられるので、副編集担当者を置いた方がいいと思った。

井上 忠純(S T V)